

NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人
長野都市経営研究所

Vol.16

2003.JUL.

発行日/2003年7月31日(年4回)

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0936 長野市岡田町178-2 長野バスターミナル会館3F TEL 026-223-7900 FAX 026-223-6166 http://www.nupri.or.jp E-mail : nupri@nupri.or.jp

第9回NUPRI総会開催

去る6月24日、第9回NUPRI定時総会がホテル犀北館にて開催されました。理事長の挨拶に続き、平成14年度事業報告ならびに平成15年度事業計画の承認が行われました。NUPRIは発足から10年近い年月を経、一昨年にはNPO法人化も果たして、活動が充実していく一方で、オリンピック熱の冷却化や長引く経済不況による先行きの不透明感も加わって、「住みよい街づくり、街の活性化のための研究・実践」という本来の活動がきわめて厳しい側面を迎えているのもまた事実です。しかし、こんな時代だからこそ、NUPRIの活動の意義は大きいと認識し、時期を得たテーマにタイムリーに取り組み柔軟性も併せ持ちながら、今年度も引き続き積極的な事業活動を推進していきたいと考えます。

平成15年度事業計画

基本方針 「住み良い元気な街づくりを目指します」

NUPRIは平成6年の活動開始以来、各種提言・実践活動を続けてきました。長野オリンピック表彰式の実現、(株)エムウェーブへの出資・経営参加は象徴的事例です。長期不況で閉塞感が漂う中、NUPRIの活動もより身近なテーマ、住み良い元気な街づくりを目指す研究・提言・実践へ総力を結集します。

部会、特別委員会は再編成することとし、基本方針に沿った活動にまい進します。



市川理事長

また新しい展開として、今年度はNUPRIの活動内容を新聞紙上で広告・公開し、一般市民にも広くPRしていきます。

T・M・O部会(夏目 潔)

昨年、設立された街づくり会社(TOMATO食品館・楽茶れんが館)の運営に関し、さまざまな案件を抱えてはいますが、事前の勉強会等を十分に行い、今後の状況を予測しながら、提言・支援していきたいと考えています。

また、新たなTMO事業やTMO手法に関しては、状況にフレキシブルに対応しながら活動していきます。会員諸兄の意見具申を期待します。

新産業創造・ニューアグリカルチャー部会(竹内 伊吉)

従来2つに分かれていた部会をひとつにし、産官学共同研究による新産業創出を研究し、地域の農業特性を活用して事業化を推進します。

産官学のうち、学である信州大学が非常に意欲的な取り組みを示しており、先頃も「信州大学地域限定プロジェクト」を立ち上げ、NPO法人申請の手続き中です。正式に認可後、NUPRIとしてもこのプロジェクトに参画する予定です。

事業内容については、「リングの木オーナー制度」が大変好調ですので、これを拡大し、事業化していく予定です。

デマンド交通部会(掛谷 嘉則)

1年間にわたり公共交通部会で研究・検討してきましたが、大変むずかしい問題に多々直面しました。そこで、対象をもう少し絞り込み、「デマンド交通(戸口から戸口までの乗り合い送迎による交通システム)」という形での実現に向け、新たな取り組みを進めていきます。

なお、これに関しては事前の十分な勉強ならびに資金に関する対応等が非常に重要な課題となるため、現在入念に準備を進めているところです。

松代イヤー支援部会(鷺澤 幸二)

長野市では2004年を「松代イヤー」と位置づけ、すでに松代支所の中に担当職員を派遣し、具体的準備にかかっています。NUPRIとしても、広域的な街づくりの観点から、平成15年度の活動の一番の目玉事

業として取り組み、成功に向けて全面的な支援体制を整えていきます。「松代イヤー」詳細内容については2~4ページ参照

長野ブランド・長野方式創出部会(室賀 豊)

世の中の流れの中で「オンリーワン」「差別化」が、いろいろな場面で求められるようになっていきます。その中で文化・教育・環境・スポーツに関し、長野らしさを研究し、提言をしていきたいと考えています。

中心市街地活性化特別委員会(滝澤 芳二)

資料として「長野中央地域市街地再生計画」をお配りしました。そこで紹介された大きなグラウンドデザインに沿いながら、活動を具現化するための組織として、長野市役所内に「長野中央市街地再生計画具現化推進専門委員会」が設置されております。この会議はオープンで開催されており、長野そごう跡地とセントラル・スクウェアの方向付けに関する議論が始まっています。当委員会としても、連携を密にしながらこの事業を見守っていききたい考えです。

エムウェーブ特別委員会(清水 光朗)

従来通りで、出資者の立場で第三セクターの健全経営を見守り、支援していくスタンスです。

信越トレッキング委員会(土屋 修三)

国土交通省北陸弘済会よりの補助事業として出発した活動ですが、昨年度、地域連続創造部会の活動として「関田山脈トレッキングルート」の開発に関しては非常に大きな成果を上げ、目標はほぼ達成したと見ております。

現状のトレッキングルートが飯山市であり、NUPRIが継続的にこれに携わっていくのが困難であることから、飯山市の「森の家」に事業継承手続を行い、NPO法人化によって、事業をより発展させようとして検討しております。

なお、地域連携は今後も重要なテーマですので、委員会自体は存続させることとし、新たなテーマに対応していく考えです。

事務局

事務局は総務・財務と広報に、中期展望委員会を新たに加え、これからのNUPRIのあり方を考えます。そして、今年度は新たに新聞広告による活動内容の広報をしていきます。

エコール・ド・まつしろ2004の事業内容について期待も盛り

第9回総会終了後の講演会には、来年開講となる「エコール・ド・まつしろ」の運営に携わる4人の皆さんに「登壇いただき、イベントの趣旨、概要ならびにNUPRIに期待することについてお話しいただきました。長野市は来年を「松代イヤー」と位置づけ、各種イベント等で活性化を図るとともに、観光の軸として広くPRしていく計画です。街づくりをテーマに活動しているNUPRIとしても、概要をつかみ、積極的に協力していきたいと考えています。



エコール・ド・まつしろ2004
実行委員会事務局次長
樋口 博 氏

「文化財を利用する」という発想

まず、このたびNUPRIの中に「松代イヤー支援部会」を設けていただいたことにつきまして深く感謝申し上げます。

今回の事業は、来年、約10年の歳月をかけた松代城の改修工事が完了することから、鷲澤長野市長の「平成16年は松代イヤー」という提案を受けて始まったことです。また一方、松代には多くの観光資源がありながら、それが活かされず、全国的な知名度がきわめて低いという現実もかねてより課題となっていました。そこで今回、この2つのテーマを軸に、松代の観光戦略を検討する中で、「エコール・ド・まつしろ」が企画されるようになったわけです。

現在、松代へは年間約30万人の観光客が訪れて



エコール・ド・まつしろ2004
担当プロデューサー
上村 道正 氏

「松代」を全国ブランドに

私は東京で広告企画、マーケティング企画の仕事をしております。昨年、「エコール・ド・まつしろ」の前段にあたる「長野市内のある地域の観光

います。小布施が年間120万人、またこの春の善光寺御開帳が2ヶ月間で628万人を集客したことと比べますと、松代の30万人はきわめてもの足りない数字であると言わざるを得ません。そこで、松代を全国から人が集まってくれような地域にしていくなために、いったい何をすればいいのか、地元の人々を交えながら、昨年から議論を進めて参りました。観光動向に関する市場調査によれば、団体旅行が激減する一方で、テーマを持った少人数グループによる「個人旅行」が堅調であるという結果を得ています。現状では、松代の観光は松代藩の歴史的な文化財を軸に、いわゆる「拝観料営業」が中心であります。こうした文化財を単に外から見せるのではなく、「活用していただく」ことに活路を見出すことが、今回の計画の大きなポイントとなっております。華道、茶道など、さまざまな「日本のたしなみごと」を楽しんでおられる、首都圏を中心とする3千万人を当面のターゲットとし、その方々に「文化財という空間を使って、日本古来のたしなみごとをやってみませんか」という旅の提案をすることが、「エコール・ド・まつしろ2004」の趣旨なのです。

戦略立案」に力を貸してくれないかと言われ、今回の事業に参画することになりました。

実は、私は一昨年、福島の博覧会で広報のプロデューサーを担当したのですが、終わってからの満足感がどうも足りないと感じていました。終了後に何も残らないという状況を反省していた矢先、この要請だったこともあり、今まで関わってきたさまざまな地域おこしの取り組みを反省するところから、今回の発想をスタートさせました。

関係者の皆さんと一緒にいろいろ考えていく中で、まず、今回の計画は松代を「全国ブランド」

「エコール・ド・まつしろ」は、1900年代初頭にパリのモンマルトルで興った文芸活動「エコール・ド・パリ」に着想を得ています。「エコール」とは、フランス語で「学校」を意味します。簡単に言えば「松代学校」ということですが、このムーブメントがスタートする年度をつけて「エコール・ド・まつしろ2004」とネーミングいたしました。

「日本をたしなむ」ムーブメントを興す

小布施町や大分県湯布院の観光事例からもわかる通り、こうした集客活動は、息の長い長期的な取り組みがあって初めて成果が出るものと認識しています。従って、長期的な活動に耐え得る組織が非常に重要になってきます。そこで、この活動の中心となる組織として、今回「エコール・ド・まつしろ倶楽部」の創設を企画しました。生涯学習や趣味をテーマに、松代の文化財を舞台に活動を行う人々を会員として募集していますが、その活動の内容は、歴史・人物、伝統文化、創作・趣味、町家の催事、行事・祭りなど、かなり多岐にわたっていくと考えています。

基本的には「学校」ですから、年間行事カレンダーに基づいて活動していきます。たとえば5月の第1土曜日には横田邸で交流茶会が、また真田邸では松代の芸能発表会が開かれています、といった具合に、あらかじめ年間計画が公表されるわけです。これにより、今までは拝観料を払って施

にしていくなことを大前提とすることにしました。

松代には素晴らしい資源がたくさんありますが、それを内側からしか見ていないというのが、私たちの最初の着目点でした。ブランドづくりは、まずお客さまの側、市場側から資源を見つめ直し、どうサービス化するかを考えることから始まります。次に、時代を先取りする形で、その地域独自の商業サービスにしていくなこと。そして3番目にその軸足をずらすことなく、我慢強く長期的に育てていくことが必要だと言われています。イベントでパッと花火を打ち上げてさっと引いてしま

設をただご覧になっていただけの観光客が、そこで行われている行事に自らの意思で参加することができ、松代の文化の香りをかきながら、今までは違った旅の体験ができるようになるわけです。また同時に、文化財という空間でお茶会や発表会などを開催することを目的に、新たに松代への旅を計画していただけるようにもなります。

2004年には、こうした学校的な事業に加え、松代城の完成に合わせた祝祭的なイベントも多数開催していく予定です。さらに、マスコミの皆さまに松代をより多く、より多面的に取り上げてもらうながら、全国的な知名度を高めていきたいと考えています。

「エコール・ド・まつしろ」は、「日本を嗜(たしな)もう」をテーマにしています。また、ロゴマークなどには、すべて佐久間象山先生の書籍からピックアップしてデザインした象山先生本人の文字を使用しました。このように松代の歴史的な人物に総動員してもらい、松代を盛り上げていこうというのが、事業のもうひとつのポイントとなっております。

事業にかかる財源のほとんどは長野市の予算から投入する予定となっております。そのため活動内容にはおのずと限界がございます。しかし、観光商業的な産業を誘発するという可能性も含め、皆さまにはぜひ高い関心を持っていただき、さまざまな形でご協力を仰ぎたいと考えております。

ようなことではなく、地域が自らできることを「オンリーワン」の売り物とし、確実にお客さまをつけていく「持続可能な自立経営」が、これからの新しい街おこしには重要です。松代に関しては、まさにその点を「形」にしていくなことを重視しながら、現状まで計画を進めてまいりました。その視点からいくつかのポイントをお話ししていきたいと思

松代发、元気な街づくり

今回の事業は、21世紀社会のビジネスモデルを

めざしております。地方都市の地域における単なる街おこしという意味合いではなく、どこへ持っていくつもりも通用する「ビジネスモデル」を考えたいという意識のもとに立案してきました。それがすなわち、今、一番新しい「時代商品」としての「エコール・ド・まつしろ」の提供であり、ブランド計画を具体化していく取り組みとなっているのです。では、具体的な考え方についてお話しします。

1 市民社会と「エコール・ド・まつしろ」

ご承知のように、21世紀は「市民が力を持つ時代」といわれています。現状では、市民は、「アクター」として街おこしに参加しているに過ぎません。しかし「まつしろ」では、市民を経営レベルにまで参画させることを目標としています。市民が責任ある立場で積極的に街づくりに参加するようになってほしい。「エコール・ド・まつしろ倶楽部」は、単なる趣味のサークルにとどまらず、自らが経営体となりやがては地域の経済活動に参画することをめざし、街おこしの中核となる組織に育てていきたいと考えています。

2 環境社会と「エコール・ド・まつしろ」

旅の傾向はエコ・ツーリズムやエコ・ミュージアムが主流となっています。これは単に自然を見たり、その中を歩くということだけを意味しているわけではありません。マーケティング的な視点で言いますと、従来のハード型開発から脱皮し、既存の資源や施設を使ってお客さまに新しいサービスを提供できるしくみを作ることを含んでいます。その観点から、松代には既に多くの魅力的な資源があるわけですが、それを「一般の方々に使っていたら」という新しい商品サービス企画を、ブランド計画の中核に置いているわけです。

3 不況社会と「エコール・ド・まつしろ」

モノが売れない時代の消費動向として、「顧客」をいかに確実につけていくかが課題です。「安・近・短」という旅の傾向の中、単価が安くなった分、プラス「頻度」を高める需要を創造しなくてはなりません。そのためには、観光が「非日常」であってはいけないのです。生活の周辺から旅に出る、すなわち、ちょっと近くに行く感覚で松代に来てもらうということが、効率のいいビジネスの目線となるわけです。

生涯学習というのは決して特別なことではなく、普通の人が普通にやっていること。それが、ちょ

っと場所が変わることによって、非常に魅力的なことになる。それが旅の形として定着したら、ひとつのビジネスモデルになり得るであろうと思うわけです。そこで、今回の活動のコンセプトを「生涯学習交流リゾート」と位置づけ、松代を「行きつけの街」にしたいと考えています。

4 高齢化社会と「エコール・ド・まつしろ」

国内旅行の主要ターゲットは、言うまでもなく生涯学習の中心にいる方々です。単に高齢者ということではなく、時間があふり、多少の金があり、さらに「知的生活」に投資をしたいと考えている世代です。従来の観光の価値に「遊ぶ、学ぶ」という価値を加え、「旅に出て学ぶ」という新しい価値を、シニアマーケットに対して明確に打ち出していく必要があります。そのために「遊学城下町・信州松代」というブランド名をつけております。ちなみに遊学とは「留学」の古い言い方です。ただ来て1、2時間見て帰るのではなく、まさに留学するつもりで滞在し、遊んで学んで帰ってほしいという意図を込めています。

5 IT社会と「エコール・ド・まつしろ」

IT社会によって「在宅」時間が増大するのは自明ですが、その分、外で人と交流し、リアルティのある時間を持ちたいと考えるのも、人間の心理であるといわれています。従ってビジネスは「在宅」と「集客」の両極が有望というわけです。その観点から、観光も単にモノを見に行く「サイトシリング」ではなく、もっと人間的なふれあいの場として旅や地域をとらえることが重要なポイントとなるはずで、長野市はオリエンピックなどを通じて、「集客」すなわちコンベンションの中核都市となったわけですが、「エコール・ド・まつしろ」では、もっと小さな暮らしまわりの集客、いわば「クラブ・コンベンション」といわれるものを多数誘致し、文化財を使って会合を開くことが楽しい体験であるということを広く知ってもらおうと考えています。「エコール・ド・パリ」が、「パリの学校」と同時に「パリ派」「パリの仲間」という両義を持ったのと同様に、「エコール・ド・まつしろ」も「松代の学校」「松代の仲間」という両方の意味を持つと解釈しています。

この計画に対し、まとまった予算は2004年の1年間しかかかっていません。しかし、この活動が毎年のことになっていいたら素晴らしいことだと考えます。そうした期待も含め、NUPRIの

皆さんには、ぜひこの活動を長期的に支える母体となつていただきたいと思っております。

地域ビジネスの新天地としての松代

では、NUPRIの皆さんに何をお願いしたいかを具体的に申し上げます。

松代を新しい観光地として全国ブランドにしていく活動の中には、当然、松代における「産業面でのブランドづくり」も必要となってきます。それができるのは、実は行政でも、私のような外部のプロデューサーでもなく、市民の方々と、そこに根を張っておられるビジネスリーダーであり、まさに皆さんの役割ではないかと思えます。皆さんには、新しい商売のブランドをつくるビジネスインキュベーターになっていただきたいというのが、NUPRIに期待する役割の根幹です。

「エコール・ド・まつしろ」は基本的に税金事業ですので、実行委員会は市民ではあってもその実態は行政です。その立場で新たなビジネス創出の前面に立つのは、おのずから限界がございます。ビジネスの経営プロ集団であるNUPRIの皆さんから物心両面のご理解、ご協力をいただけない限り、ファンダメンタルとしてのブランドはできないと考えています。ぜひご協力をお願いいたします。現在、松代が自他ともに認める弱点として、「食」と名産品がない」という点がクローズアップされています。そこで、「美」と「食」のビジネスおこしの拠点を作ることを今回の事業の核のひとつに据え、「エコール・ド・まつしろ美食倶楽部」を提案します。

文化財活用というものは、国宝級の文化財を趣味や生涯学習の舞台として使っていたらいいかと同時に、土蔵や武家屋敷など既存の町家を朽ち果てさせず、ビジネスの拠点として再生させようという取り組みも含まれています。既にいくつかの町家や土蔵を使った起業の動きが見え始めていますが、そこに、松代の「食」と「名産品」おこしの活動を付加し、人が集まりたくなるような具体的な「形」にしないと、町の真の活性化にはなっていないか心配しています。名産品を創造するというのは、単にご当地饅頭を作るといったことではなく、ここにしかないアート・工芸の発信地になるということ。そのためには、呼び物となるものを創る専門家がいないと、本物の倶楽部にはなり得ません。その人脈・資金に関し、NUP

RIさんにぜひご協力を仰ぎたいのです。

具体的に申し上げますと、「アトリエ・ギャラリー・レストラン」という業態にチャレンジするという構想がございます。事業内容としては、工芸作家を誘致し、その作品を松代のブランド品として創作、展示、販売し、ブランドおこしの現場とする「松代アートブランド工房」をつくれたらと考えています。そこは単に見せる空間ではなく、お客さまの滞在時間を高め、「学び」の要素を旅に取り入れてもらうために、公開型の教室を行う体験工房としていく考えです。そこに「ギャラリーストラン」を併設して「味」の売り物づくりを事業として付加します。「美食倶楽部」的な新ブランドの立ち上げとサービス拠点づくりを構想しているわけです。

今回のブランド戦略においては、大作家が作る大作品は対象外です。都会のご婦人方がおしゃれな旅をするのに大事なことは「買える」ことなのです。「松代に行ったら他にはないこんなものがあった」というオンリーワンを作れるような作家を誘致したいと考えております。その一環として、川村晴忠さんという工芸作家も立候補しておられます。NUPRIの皆さんにはこの事業の出資株主としてご末永くご参入いただきたいと、お願いをいたす次第です。

この計画が引き金となり、松代に次々といろいろな投資が誘発されていくことが、ブランドづくりの最終目的です。そういう意味では、松代は非常に多くの可能性を秘めており、地域ビジネスの新天地であると言えらると思います。「元氣な街づくり」の成功モデルになることを確信いただき、ぜひNUPRIの皆さんにご支援、ご協力をお願い申し上げます。

最後に、NUPRIという団体に対しては、ぜひご投資を、と申し上げますが、個々の皆さんには、ぜひ「エコール・ド・まつしろ2004」への参加をお願いいたします。皆さん、それぞれにさまざまな自由な会にご参加しておられるでしょうし、同窓会などもありかと思えます。そうした小さな会合を、松代の文化財でお開きになってみてください。きっと新鮮な感動を味わえることと思えます。



エコール・ド・まつしろ2004
総括プロデューサー
秋山 智弘 氏

「松代の明日」を語る「エコール・ド・まつしろ」

ご紹介の中でプロデューサーという言葉が出てきましたが、まず、プロデューサーとはいったい何をするのかということに関し、お話ししたいと思います。

今回は、上村さん、石川さん、そして私の3人でプロデューサーをすることになるわけですが、プロデューサーとは、皆さんが実際に企業を経営され、マーケティングをはじめとするさまざまなことをしながら経営管理・運営しておられる、そのことそのものといってもよいかと思えます。皆さんは会社経営にあたり、何をするかという方向性と理念を持って計画を立て、それを正確に事業化しておられます。次に事業化にあたっては必ず人の要素が必要になりますが、それぞれの場に合った人材適所を自分の目で見極めた上で当てはめていってほしいと思います。そして3つ目には、費用の面でマイナスにならないノウハウを持ってもらえる。おおまかに言うとこの3つだと思えますが、私たちのプロデューサーという仕事も、それにきわめてよく似ています。費用対効果、人をどう活かすか、そして何より大事なのが「その計画の先の見通しができるかできないか」ということになります。



エコール・ド・まつしろ2004
担当プロデューサー
石川 りえ 氏

今年春より、大門の「楽茶れんが館」のディレクターとして仕事をさせていただいております。資金もないのに新しいプロジェクトを始めた私に、

ながら、まずその点から論議を重ね、事業を立ち上げました。もちろん地元の方々を中心となって立ち上げ、ここまでできたわけですが、そこに私どもがプロデューサーとしての視点からアドバイスをすることにより、具体的な運営が始まっているわけです。

松代は、市街地から離れた川の向こう岸に、非常にまとまった城下町として存在し、約2万人の方々が住まっています。素晴らしいところではありますが、今、そのままがいいのかという疑問が、最初の印象としてわきました。伝統と文化があれだけ積み重なった場所ではありますが、それを大切に保存するだけいいのか、ということなのです。

人が住まなくなった家は早く古くなるといわれますが、伝統や文化も保存するだけでは色褪せていくだけで前へ進みません。保存し、かつ有効に活用して初めてあらゆるモノが長持ちをするのではないのでしょうか。今、松代に住んでいる方々は確かに幸せではあるでしょう。しかし、松代の明日、あさって、そして次の世代に何を残せるのかを考えたときに、果たして今のままでいいのだろうかと考えたわけです。そんな折に、長野市の方から「観光戦略」という課題をいただきました。

「教養観光」「遊学観光」という視点

観光戦略として松代をとらえたとき、何ができるかを考えていくうち、今までにない概念かもしれないませんが、「教養・遊学観光」なのではないかという結論に行き着きました。「遊学」という言葉について少しお話ししますと、夏目漱石がロンドンへ「遊学」し、帰国後ブレイクして大文豪になるわけですが、もしあの遊学がなかったら、文豪・夏目漱石はなかったであろうと言われています。

NUPRIの皆さまから「朝粥をやってほしい」というご提案を頂戴し、さらに補助金を出していただきました。心より感謝申し上げます。

来年の松代の計画は、まだ発表に至らない部分も含め、かなりおもしろいプロジェクトになると信じております。ぜひ皆さんのお力をお貸しいただきたいと思うと同時に、「エコール・ド・まつしろ倶楽部」の会員にもなっていただき、文化財をさまざまに活用していただきたいと思っています。松代には、まだまだ埋もれた魅力がたくさんご

そんなことも踏まえながら、松代を「教養観光」「遊学観光」の地としてとらえられないだろうか考えたわけです。一方、従来の観光のイメージを考え合わせ、「観光」という言葉はあえて使わない方が得策なのではないかという発想で「エコール・ド・まつしろ」という事業が始まりました。

「エコール」は「学校」ということですが、同じ学校でもアカデミズムに支えられているだけでなく、もっと実益のある、毎日の暮らしやビジネス活動に役に立つような総合的な教養を授けてくれる学校と認識しています。フランスでは「エコール」を出ているというのが、エリートの証と評価されます。たとえば、パリで最も権威あるエコールのひとつに、1974年創立の「エコール・ド・シユペリユール」がありますが、そこはバスツール、ロマン・ロランなど、我々が名前を知っているフランス人の多くを輩出しています。彼らはそこで、非常に実務的なことを含めた教養を身につけました。松代においても、あえて「学校」ではなく「スクール」ではなく「ユニバーシティ」でもなく、「エコール・ド・まつしろ」にすることにより、松代がそんな場所になることをめざしているのです。

1920年代、第一次世界大戦が終わってパリが混乱のさ中にあつたとき、東ヨーロッパ各国から流れてきた芸術家たちが、パリを学校に見立てて文化を開花させ、「エコール・ド・パリ」派を作ったのでした。その中にはシャガール、モディリアニ、藤田嗣治などがいて、抒情的、写実的な絵画を復活させました。「エコール」の中にはそういった「地に着いた」「実用的な」というイメージがあります。松代というのは、まさにそれにふさわしい場所なのではないかと思うわけです。

ございます。2週間前、森まゆみさんという作家を案内して松代を歩いたとき、「私は、ここはブレイクしてほしくないけれど、ひよっとするとブレイクするね」とおっしゃっていました。彼女は地味な人ですが、非常に勘の鋭い女性です。そうした方々の勘やアドバイスなども考慮に入れ、松代を荒らすことなく、いい形でこれからの時代に合った地域としてアピールしていけたらと思っています。ぜひ皆さんのご協力をよろしく願っています。

具体的なビジネスモデルについては、先ほど上村プロデューサーが説明した通りです。これが実現したら、本当に素晴らしいことになるかと確信しています。

20世紀に工業的にも技術的にも世界のトップレベルとなった日本ですが、21世紀の今、人々は「生きがい・心の豊かさ・健康・余生の楽しみ」が欠如していると感じており、本心からその充実を求めています。数々の歴史が刻まれ、佐久間象山や松井須磨子のように外へ出て活躍した人々を生み出してきた松代は、「教養観光」によって人々にそうした充実を提供できる場所としてびったりだと考えます。同時に、ここで人が育ち、ここから巣立っていくような環境となっていくことを、長野市の方々も望んでいるのではないのでしょうか。NUPRIの皆さんは、そうした地域の育成を導く重要な役割を果たすリーダーととらえています。プロジェクトの推進には時間がかかりますが、大いにズクを出して、成功に向けてご協力をお願いいたします。

